

女ふどこのり昔の時に過て美麗かり神ハ心永遠をおもふの思念を賦けたまへり然ハ人ハ神
 のなしたまふ作爲を如より終まで知明ひてことを得ざるなり我知人の中ハこの世に於て快樂
 をなし善をおこなふより外ハ善事ハわらずまた人ハ必み食欲を余ハこの勞苦よりて逸樂を得べきな
 り是すなりち神の賜物たり我知凡て神のなしたまふ事ハ限なく存せしは是ハ加ふべき所なく是ハ減す
 べきどころ無し神の之をなしたまふ人をさてこの前ハ畏れおめなしたためなり昔ありたる者ハ今もわ
 り候わらん者ハ既にありし者なり神ハこの邊やらまじし者をおめしたまふ我また日の下を見るに審判を
 おこなふ所に邪曲なる事あり公議を行ふとこのに邪曲なる事あり我すな之に心に謂けらく神ハ義者と
 惡者とを觀きたまふた彼處においてハ萬の事と當の所爲に時わらなり我また心本謂けらく是事わらハ
 是世の人のためなり即ち神ハ斯世の人を檢して之ハこの世の觀のほどくなくことを自ら曝らめめたまふなり
 世上の人本臨むとこの事ハ同一にして是も死ハ彼も死
 かり皆同一の呼吸も依り人ハ獸にまさる所なし皆空なり皆一の所に往く皆塵より出で皆塵かかへるな
 り誰か人の魂の上に昇り獸の魂の地にくだることを知ん然ハ人ハこの動作によりて逸樂をなすに如
 けし是の分なれどなり我これを見らるの身の後の事ハ誰かこれを携へゆきて見せまじる者わらんや
 けに我身を聳して日の下に行はるる諸の虐遇を視たり嗚呼處けらるる者の涙なかる之を感ひ
 る者わらざるありまた虐げらるる者の手にハ彼等ハこれを慰むる者わらざるなり我ハ猶生る生者
 よりも既に死たる死者をもて幸かりとすまたこの二者よりも幸なるハ未だ世にわらずして日の下に居
 らなはるる惡事を見ざる者なり我また諸の勞苦と諸の工事の精巧とを觀るに是人ハのたがひも城みわ

- 1 傳道書 四章 十二節
- 2 傳道書 四章 十三節
- 3 傳道書 四章 十四節
- 4 傳道書 四章 十五節
- 5 傳道書 四章 十六節
- 6 傳道書 四章 十七節
- 7 傳道書 四章 十八節
- 8 傳道書 四章 十九節
- 9 傳道書 四章 二十節
- 10 傳道書 四章 二十一節
- 11 傳道書 四章 二十二節
- 12 傳道書 四章 二十三節
- 13 傳道書 四章 二十四節
- 14 傳道書 四章 二十五節
- 15 傳道書 四章 二十六節
- 16 傳道書 四章 二十七節
- 17 傳道書 四章 二十八節
- 18 傳道書 四章 二十九節
- 19 傳道書 四章 三十節
- 20 傳道書 四章 三十一節
- 21 傳道書 四章 三十二節
- 22 傳道書 四章 三十三節
- 23 傳道書 四章 三十四節
- 24 傳道書 四章 三十五節
- 25 傳道書 四章 三十六節
- 26 傳道書 四章 三十七節
- 27 傳道書 四章 三十八節
- 28 傳道書 四章 三十九節
- 29 傳道書 四章 四十節
- 30 傳道書 四章 四十一節
- 31 傳道書 四章 四十二節
- 32 傳道書 四章 四十三節
- 33 傳道書 四章 四十四節
- 34 傳道書 四章 四十五節
- 35 傳道書 四章 四十六節
- 36 傳道書 四章 四十七節
- 37 傳道書 四章 四十八節
- 38 傳道書 四章 四十九節
- 39 傳道書 四章 五十節
- 40 傳道書 四章 五十一節
- 41 傳道書 四章 五十二節
- 42 傳道書 四章 五十三節
- 43 傳道書 四章 五十四節
- 44 傳道書 四章 五十五節
- 45 傳道書 四章 五十六節
- 46 傳道書 四章 五十七節
- 47 傳道書 四章 五十八節
- 48 傳道書 四章 五十九節
- 49 傳道書 四章 六十節
- 50 傳道書 四章 六十一節
- 51 傳道書 四章 六十二節
- 52 傳道書 四章 六十三節
- 53 傳道書 四章 六十四節
- 54 傳道書 四章 六十五節
- 55 傳道書 四章 六十六節
- 56 傳道書 四章 六十七節
- 57 傳道書 四章 六十八節
- 58 傳道書 四章 六十九節
- 59 傳道書 四章 七十節
- 60 傳道書 四章 七十一節
- 61 傳道書 四章 七十二節
- 62 傳道書 四章 七十三節
- 63 傳道書 四章 七十四節
- 64 傳道書 四章 七十五節
- 65 傳道書 四章 七十六節
- 66 傳道書 四章 七十七節
- 67 傳道書 四章 七十八節
- 68 傳道書 四章 七十九節
- 69 傳道書 四章 八十節
- 70 傳道書 四章 八十一節
- 71 傳道書 四章 八十二節
- 72 傳道書 四章 八十三節
- 73 傳道書 四章 八十四節
- 74 傳道書 四章 八十五節
- 75 傳道書 四章 八十六節
- 76 傳道書 四章 八十七節
- 77 傳道書 四章 八十八節
- 78 傳道書 四章 八十九節
- 79 傳道書 四章 九十節
- 80 傳道書 四章 九十一節
- 81 傳道書 四章 九十二節
- 82 傳道書 四章 九十三節
- 83 傳道書 四章 九十四節
- 84 傳道書 四章 九十五節
- 85 傳道書 四章 九十六節
- 86 傳道書 四章 九十七節
- 87 傳道書 四章 九十八節
- 88 傳道書 四章 九十九節
- 89 傳道書 四章 一百節

以て成る者たるなり是も空にして風を捕ふるが如し愚なる者ハ手を果ねてこの身の肉を食ふ
 物を盡て本穩にわらるる兩手に物を盡て勞苦を盡て風を捕ふるに愈れり我また身をめぐらし日の下に空なる
 事のあるを見たり按に人ハ只獨りして伴侶もなく子もなく兄弟もなく然にこの勞苦ハ都て窮なくろ
 の目ハ富に飽て空し彼また言ず嗚呼我ハ誰がために勞するや何ぞて我ハ心を樂せざるや是もまた
 空にして勞力の苦き者あり二人ハ一人ハ愈る其ハこの勞苦のために善報を得るハあり即ちこの跌倒
 る時にハ一箇の人の伴侶を扶けおすべし然ぞ孤身にして跌倒る者ハ憐なるか否之を扶けおす者な
 ざなり又二人どもに疑れハ憐れかり一人かりバ争で温機かりんや人もしこの一人を攻撃バ二人して
 これに當るべし三根の細ハ容易く斷ざるあり貧く去て賢き童子ハ老て愚にして誠を納ざる王に愈る
 彼の年暮より出て王とあれり然ぞこの國に生れし時ハ貧かりき我日の下にわゆるはどの群生ガ彼王
 本續てこまに代りて立てこの童子どもにわらざるを觀たり民ハすべて際限なしの前にわらし者み
 然り後にきたる者また彼を憐れず是も空にして風を捕ふるがごとし
 其の惡をとおこなひたることを知ざるなり汝神の前ハわらしてハ輕々しく口を開くなかれ心を握めて安に
 言をいだしなかれ其ハ神ハ天にいまし汝之地にをればかり然バ汝の言詞を少からしめよ夫夢ハ事の樂
 多によりて生ト愚なる者の賢ハ言の衆多よりて顯るなり汝神ハ賢願をかけな之を還すことを怠
 なかれ神ハ愚なる者を憐れびたまはざるあり汝ハこのかけし賢願を還すべし賢願をかけてこれを還さ
 るよりハ寧ろ賢願をかけざるハ汝も善し汝の口をもて汝の身に罪を犯さしむるか亦復者の前に其

- 1 傳道書 五章 一節
- 2 傳道書 五章 二節
- 3 傳道書 五章 三節
- 4 傳道書 五章 四節
- 5 傳道書 五章 五節
- 6 傳道書 五章 六節
- 7 傳道書 五章 七節
- 8 傳道書 五章 八節
- 9 傳道書 五章 九節
- 10 傳道書 五章 十節
- 11 傳道書 五章 十一節
- 12 傳道書 五章 十二節
- 13 傳道書 五章 十三節
- 14 傳道書 五章 十四節
- 15 傳道書 五章 十五節
- 16 傳道書 五章 十六節
- 17 傳道書 五章 十七節
- 18 傳道書 五章 十八節
- 19 傳道書 五章 十九節
- 20 傳道書 五章 二十節
- 21 傳道書 五章 二十一節
- 22 傳道書 五章 二十二節
- 23 傳道書 五章 二十三節
- 24 傳道書 五章 二十四節
- 25 傳道書 五章 二十五節
- 26 傳道書 五章 二十六節
- 27 傳道書 五章 二十七節
- 28 傳道書 五章 二十八節
- 29 傳道書 五章 二十九節
- 30 傳道書 五章 三十節
- 31 傳道書 五章 三十一節
- 32 傳道書 五章 三十二節
- 33 傳道書 五章 三十三節
- 34 傳道書 五章 三十四節
- 35 傳道書 五章 三十五節
- 36 傳道書 五章 三十六節
- 37 傳道書 五章 三十七節
- 38 傳道書 五章 三十八節
- 39 傳道書 五章 三十九節
- 40 傳道書 五章 四十節
- 41 傳道書 五章 四十一節
- 42 傳道書 五章 四十二節
- 43 傳道書 五章 四十三節
- 44 傳道書 五章 四十四節
- 45 傳道書 五章 四十五節
- 46 傳道書 五章 四十六節
- 47 傳道書 五章 四十七節
- 48 傳道書 五章 四十八節
- 49 傳道書 五章 四十九節
- 50 傳道書 五章 五十節
- 51 傳道書 五章 五十一節
- 52 傳道書 五章 五十二節
- 53 傳道書 五章 五十三節
- 54 傳道書 五章 五十四節
- 55 傳道書 五章 五十五節
- 56 傳道書 五章 五十六節
- 57 傳道書 五章 五十七節
- 58 傳道書 五章 五十八節
- 59 傳道書 五章 五十九節
- 60 傳道書 五章 六十節
- 61 傳道書 五章 六十一節
- 62 傳道書 五章 六十二節
- 63 傳道書 五章 六十三節
- 64 傳道書 五章 六十四節
- 65 傳道書 五章 六十五節
- 66 傳道書 五章 六十六節
- 67 傳道書 五章 六十七節
- 68 傳道書 五章 六十八節
- 69 傳道書 五章 六十九節
- 70 傳道書 五章 七十節
- 71 傳道書 五章 七十一節
- 72 傳道書 五章 七十二節
- 73 傳道書 五章 七十三節
- 74 傳道書 五章 七十四節
- 75 傳道書 五章 七十五節
- 76 傳道書 五章 七十六節
- 77 傳道書 五章 七十七節
- 78 傳道書 五章 七十八節
- 79 傳道書 五章 七十九節
- 80 傳道書 五章 八十節
- 81 傳道書 五章 八十一節
- 82 傳道書 五章 八十二節
- 83 傳道書 五章 八十三節
- 84 傳道書 五章 八十四節
- 85 傳道書 五章 八十五節
- 86 傳道書 五章 八十六節
- 87 傳道書 五章 八十七節
- 88 傳道書 五章 八十八節
- 89 傳道書 五章 八十九節
- 90 傳道書 五章 九十節
- 91 傳道書 五章 九十一節
- 92 傳道書 五章 九十二節
- 93 傳道書 五章 九十三節
- 94 傳道書 五章 九十四節
- 95 傳道書 五章 九十五節
- 96 傳道書 五章 九十六節
- 97 傳道書 五章 九十七節
- 98 傳道書 五章 九十八節
- 99 傳道書 五章 九十九節
- 100 傳道書 五章 一百節

ハ過誤なりといふべからず、怒り神汝の言を激したまはん。夫多ければ空なる事、多し言詞の多きもまた然り。汝エホバを畏め、汝國の中に貧乏者を履過る事および公道と公議を枉るべし。あるを見るもの事、わを怪むな。かれ其の位高き人よりも富き者ありて、その人を伺へた。其の銀を好む者ハ、銀よりも富き者あるあり。國の利益ハ空く是れ、わが王者が農事に勤むるにあり。富き者ハ、銀を好む者ハ、富き者無し。富き者らんとてを好む者ハ、得るところ有らず。是れ空あり。貨財増え、これを食む者も増す。なりの所有主ハ、唯目にこれを看のみ。の外、何の益かあらん。勞する者ハ、その食ふところ多きも少きも、快く睡るなり。然れども、富者ハ、その貨財の多むために睡ることを得せず。我また日の下に患の大なる者、あるを見たり。すなはち財寶のこれを蓄ふる者、身に雪をおよぼすことある。是れ亦、その財寶ハ、また旅難かよりて失落せざり。然るの人手を擧ること、わらんもの手ハ、何物もあつることなし。人ハ、母の胎より出て來りしごとく、にまた裸體にして、再びゆくべし。の勞苦によりて得たる者を、塵塵手にとりて携へ、ゆくことを得ざるなり。人ハ、空くるの來りしごとく、にまた去ゆかざるを得ず。是れまた患の大なる者あり。抑風を退て勞する者、何の益をうる。ことと有んや。人ハ、生命の涯、黑暗の中に食ふことを爲す。また憂鬱多かり。疾病身にあり。憤怒あり。視よ、我ハ、斯觀たり。人の身にどりて善かつ美ある者、神にたまはる。その生命の極、貧乏をば、且その目の下に勞して働ける勞苦によりて得るところの福祿を身に享する事あり。是の分、かれハ、なり。何人により、す神がことをに富む財を興へて、うれに食ふことを得せ。また、その分を取り、の勞苦に、よりて快樂を得ることをせ。また、その事ハ、神の賜物たるなり。かくる人ハ、その年齒の目を憶ゆること、深からず。其の神を、其の喜ぶこと、にまたかひて應ることを爲したまへ。なり。

千二百五十五
千二百五十六
千二百五十七
千二百五十八
千二百五十九
千二百六十
千二百六十一
千二百六十二
千二百六十三
千二百六十四
千二百六十五
千二百六十六
千二百六十七
千二百六十八
千二百六十九
千二百七十
千二百七十一
千二百七十二
千二百七十三
千二百七十四
千二百七十五
千二百七十六
千二百七十七
千二百七十八
千二百七十九
千二百八十
千二百八十一
千二百八十二
千二百八十三
千二百八十四
千二百八十五
千二百八十六
千二百八十七
千二百八十八
千二百八十九
千二百九十

ハ過誤なりといふべからず、怒り神汝の言を激したまはん。夫多ければ空なる事、多し言詞の多きもまた然り。汝エホバを畏め、汝國の中に貧乏者を履過る事および公道と公議を枉るべし。あるを見るもの事、わを怪むな。かれ其の位高き人よりも富き者ありて、その人を伺へた。其の銀を好む者ハ、銀よりも富き者あるあり。國の利益ハ空く是れ、わが王者が農事に勤むるにあり。富き者ハ、銀を好む者ハ、富き者無し。富き者らんとてを好む者ハ、得るところ有らず。是れ空あり。貨財増え、これを食む者も増す。なりの所有主ハ、唯目にこれを看のみ。の外、何の益かあらん。勞する者ハ、その食ふところ多きも少きも、快く睡るなり。然れども、富者ハ、その貨財の多むために睡ることを得せず。我また日の下に患の大なる者、あるを見たり。すなはち財寶のこれを蓄ふる者、身に雪をおよぼすことある。是れ亦、その財寶ハ、また旅難かよりて失落せざり。然るの人手を擧ること、わらんもの手ハ、何物もあつることなし。人ハ、母の胎より出て來りしごとく、にまた裸體にして、再びゆくべし。の勞苦によりて得たる者を、塵塵手にとりて携へ、ゆくことを得ざるなり。人ハ、空くるの來りしごとく、にまた去ゆかざるを得ず。是れまた患の大なる者あり。抑風を退て勞する者、何の益をうる。ことと有んや。人ハ、生命の涯、黑暗の中に食ふことを爲す。また憂鬱多かり。疾病身にあり。憤怒あり。視よ、我ハ、斯觀たり。人の身にどりて善かつ美ある者、神にたまはる。その生命の極、貧乏をば、且その目の下に勞して働ける勞苦によりて得るところの福祿を身に享する事あり。是の分、かれハ、なり。何人により、す神がことをに富む財を興へて、うれに食ふことを得せ。また、その分を取り、の勞苦に、よりて快樂を得ることをせ。また、その事ハ、神の賜物たるなり。かくる人ハ、その年齒の目を憶ゆること、深からず。其の神を、其の喜ぶこと、にまたかひて應ることを爲したまへ。なり。

「我觀るに日の下に一件の愚なり。是ハ人の間に恒ある者なり。すなはち神富望望と望望と人たて、たて、その心に慕ふ者、一件もこれに缺ることなからしめたまひ。あがらも神また、その人に之を食ふことを得せ。また、その人たて、たて、他人のこれ食ふことと、わが是空あり。患疾あり。假令、人百人の子を擧げ、また長壽して、その年齒の日多からんも、若うの心景福に満足せざるか。又、罪あることとを得ざる。われ、我言ハ、流産の子ハ、その人たまはるなり。夫流産の子ハ、その來ること空くして、黑暗の中に去ゆ。その名ハ、黑暗の中に、かくる。よかり。又、是ハ、日を見ることとなく。物を知ることなけれ。彼よりも、安泰あり。人の壽命、千年に倍する。とも、福祿を蒙れるに、わが亦、皆一所に往く。にわらずや。人の勞苦、皆その口のためなり。その心ハ、なほも飽ざる。ところあり。賢者、なす、愚者に勝るところ。わらなや。また、世人の、前ハ、歩行することを、知ること。の貧者も、何の勝るところ有んや。目、わが觀る、事物ハ、心のさまよひ、歩くも、愈るなり。是れ、また、空にして、風を捕入る。前、ごとし。皆て、在し者ハ、久き前、わす、わが、その名を命られたり。即ち、是ハ、人なり。と知る。然ハ、是ハ、わが、自己よりも、力強き者と、争ふことを得ざるなり。衆多の言論ありて、虚浮き事を増す。然、人ハ、何の益も、わらなや。人ハ、その空虚、生命の日の影のごとく、に遠る。あかり、誰か、この世に、わが、如何ある事か。人のために、善き者か。るや。を、知ん、誰か、その身の、後に、日の下に、わらなや。この事を、人に、告ぐる者、わらなや。

「名ハ、美言に、愈り、死る日ハ、生るる日に、愈る。哀傷の家、に入ハ、宴樂の家、にいる。か、愈る。其ハ、一切の人の、終かくのごとく、かま、心、か、生る者、また、ふれ、その心の、に、どし、わらん。悲哀ハ、嬌笑に、愈る。其ハ、面に、變り、色を、帯る。なれ、心も、善に、むかへ、た。なり。賢き者の、心ハ、哀傷の家、か、あり。愚なる者の、心ハ、喜樂の家、に、あり。賢き者の、勤責を、聽ハ、愚なる者の、歌詠を、聽に、愈る。なり。愚なる者の、笑ハ、益の下に、燃る。荆棘の、靡のごとく、是

千二百五十五
千二百五十六
千二百五十七
千二百五十八
千二百五十九
千二百六十
千二百六十一
千二百六十二
千二百六十三
千二百六十四
千二百六十五
千二百六十六
千二百六十七
千二百六十八
千二百六十九
千二百七十
千二百七十一
千二百七十二
千二百七十三
千二百七十四
千二百七十五
千二百七十六
千二百七十七
千二百七十八
千二百七十九
千二百八十
千二百八十一
千二百八十二
千二百八十三
千二百八十四
千二百八十五
千二百八十六
千二百八十七
千二百八十八
千二百八十九
千二百九十

また空なり賢人も虐待る事によりて狂するに至るあり賄賂人の心を壞なふ事の終りの故より
 も善し察忍心ある者ハ憐愍心ある者に勝る汝氣を急くして怒るなかく怒り愚なる者の胸おやどるなり
 昔の今にまざるハ何故かや汝言なれ汝の斯る問をなすハ是智慧よりいづる者にあらざるなり
 慧の上に財産をかぬれば善し然れば日を見る者等に利益おはかるべし智慧も身の護庇也なり銀子も身
 の護庇也なる然ぞ智慧ハまたこれ有る者に生命を保しむは知識の殊勝たるどころなり汝神の作為を
 考へて神の曲たまひし者ハ誰かこれを直くすることを得ん幸福ある日にハ樂め禮思ある日に入考へ
 る神ハこの二者をわひ交錯て降したまふ是ハ人を去ての後の事を知ることをかからせめたためなり我
 この空の世ありて各様の事を見たり義人の義をおてかひて亡ぶるあり悪人の惡をおてかひて長壽わ
 り汝義に過るるかかれ汝かんな身を滅すべけんや汝此を執り善しまた彼にも手を放すかか神を畏む者この
 勿き汝なをなす時いたらざるに死べけんや汝此を執り善しまた彼にも手を放すかか神を畏む者この
 一切の者の中より逃れ出るあり智慧の智者を帯くることハ邑の英雄者十八にまざるあり正義して善
 をかかみ罪を犯すことかきハ世にあることかき人の言出す言詞にハ凡て心をどむる勿き恐へハ汝
 の僕の汝を証人を開てどもわらん汝も悪人を証人としてあるハ汝の心に知ることかき我智慧をもて
 の一切の事を試み我ハ智者とならんと謂たりしが遠くおよむざるあり事物の理ハ遠くして甚だ深し誰
 かこれを究むることを得ん我ハ身をめぐらし心をもちめて物を知り事を探り智慧と道理を察めんとし
 又惡の愚たるも愚癡の狂妄たるを知らんせり我了れり婦人の心の細く網のおどくらの手練練のごと
 くなる者ハ是死よりも苦き者なり神の悦びたまふ者ハ之を避ることを得ん罪人ハ之に執らるべし傳道

千八十二
 一節一〇三
 二節一〇四
 三節一〇五
 四節一〇六
 五節一〇七
 六節一〇八
 七節一〇九
 八節一一〇
 九節一一一
 十節一二二
 十一節一二三
 十二節一二四
 十三節一二五
 十四節一二六
 十五節一二七
 十六節一二八
 十七節一二九
 十八節一三〇
 十九節一三一
 二十節一三二
 二十一節一三三
 二十二節一三四
 二十三節一三五
 二十四節一三六
 二十五節一三七
 二十六節一三八
 二十七節一三九
 二十八節一四〇
 二十九節一四一
 三十節一四二
 三十一節一四三
 三十二節一四四
 三十三節一四五
 三十四節一四六
 三十五節一四七
 三十六節一四八
 三十七節一四九
 三十八節一五〇
 三十九節一五一
 四十節一五二
 四十一節一五三
 四十二節一五四
 四十三節一五五
 四十四節一五六
 四十五節一五七
 四十六節一五八
 四十七節一五九
 四十八節一六〇
 四十九節一六一
 五十節一六二
 五十一節一六三
 五十二節一六四
 五十三節一六五
 五十四節一六六
 五十五節一六七
 五十六節一六八
 五十七節一六九
 五十八節一七〇
 五十九節一七一
 六十節一七二
 六十一節一七三
 六十二節一七四
 六十三節一七五
 六十四節一七六
 六十五節一七七
 六十六節一七八
 六十七節一七九
 六十八節一八〇
 六十九節一八一
 七十節一八二
 七十一節一八三
 七十二節一八四
 七十三節一八五
 七十四節一八六
 七十五節一八七
 七十六節一八八
 七十七節一八九
 七十八節一九〇
 七十九節一九一
 八十節一九二
 八十一節一九三
 八十二節一九四
 八十三節一九五
 八十四節一九六
 八十五節一九七
 八十六節一九八
 八十七節一九九
 八十八節二〇〇
 八十九節二〇一
 九十節二〇二
 九十一節二〇三
 九十二節二〇四
 九十三節二〇五
 九十四節二〇六
 九十五節二〇七
 九十六節二〇八
 九十七節二〇九
 九十八節二一〇
 九十九節二一一
 一百節二一二

者言ふ禱ふ我の欺を知んとして之に算へてつひに此事を了る我があはれ得ざる者ハ是か手
 人の中に一箇の男子を得たれどもりの欺の中ハ一箇の女子をも得ざるあり我了れるどころハ唯是
 のみ即ち神ハ人を正直者お造りたまひしに人衆多の計略を案出せしかり
 誰か智者ハ如誰か事物の理を解ことを得ん人の智慧ハ人の面ハ光輝あらしむ又その粗
 暴面も變改べし我言ふ王の命を守るべし既ハ神をさして誓ひしてどわれ自然るべきなり早きりて王
 の前を去ることなれ惡き事おつのであること勿れ其ハ彼ハ凡てその好むことを爲すあり王の言語ハ
 權力あり然れば誰か汝何をあすやといふことを得ん命令を守る者ハ禍患を受けるに至らず智者の心ハ
 時期と判断を知なり其の事務にハ時あり判断あり是をもて大なる禍患をうくるお至るありハの後
 におわらんとこの事を知らずまた誰か如何なる事のおわらんかを之に告る者わらん靈魂を掌管て靈魂を留
 めうる人わらず人ハその死の日ハ權力あること無し此戰爭ハハ釋放たるく者わらず又罪惡ハこれを
 人者を救ふことを得せざるなり我この一切の事を見また日の下おあておはるく諸の事ハ心を用ゐたり
 時としてハ此人彼人を治めてこそに害を蒙らしむることどわり我見しに悪人の罪られて安息おあるあり
 また善をおてなふ者の聖所を離れてその邑に忘らるるに至るあり是また空なり惡き事の報速おき
 たらざる故ハ世人心を專おして惡をおてなふ罪を犯す者百次惡をなして猶長命われども我知る神
 を畏みてその前ハ畏怖をいだく者ハ幸福あるべし但し惡人ハハ幸福あらすまたその生命も長からず
 して影のごとし其ハ神の前ハ畏怖をいだくことなけむべかり我日の下おあておはるくをを見
 たり即ち義人ハして惡人の遣べき所遣ふ者わたり惡人にして義人の遣べきところに遣ふ者わたり我請

千八十三
 一節二〇三
 二節二〇四
 三節二〇五
 四節二〇六
 五節二〇七
 六節二〇八
 七節二〇九
 八節二一〇
 九節二一一
 十節二一二
 十一節二一三
 十二節二一四
 十三節二一五
 十四節二一六
 十五節二一七
 十六節二一八
 十七節二一九
 十八節二二〇
 十九節二二一
 二十節二二二
 二十一節二二三
 二十二節二二四
 二十三節二二五
 二十四節二二六
 二十五節二二七
 二十六節二二八
 二十七節二二九
 二十八節二三〇
 二十九節二三一
 三十節二三二
 三十一節二三三
 三十二節二三四
 三十三節二三五
 三十四節二三六
 三十五節二三七
 三十六節二三八
 三十七節二三九
 三十八節二四〇
 三十九節二四一
 四十節二四二
 四十一節二四三
 四十二節二四四
 四十三節二四五
 四十四節二四六
 四十五節二四七
 四十六節二四八
 四十七節二四九
 四十八節二五〇
 四十九節二五一
 五十節二五二
 五十一節二五三
 五十二節二五四
 五十三節二五五
 五十四節二五六
 五十五節二五七
 五十六節二五八
 五十七節二五九
 五十八節二六〇
 五十九節二六一
 六十節二六二
 六十一節二六三
 六十二節二六四
 六十三節二六五
 六十四節二六六
 六十五節二六七
 六十六節二六八
 六十七節二六九
 六十八節二七〇
 六十九節二七一
 七十節二七二
 七十一節二七三
 七十二節二七四
 七十三節二七五
 七十四節二七六
 七十五節二七七
 七十六節二七八
 七十七節二七九
 七十八節二八〇
 七十九節二八一
 八十節二八二
 八十一節二八三
 八十二節二八四
 八十三節二八五
 八十四節二八六
 八十五節二八七
 八十六節二八八
 八十七節二八九
 八十八節二九〇
 八十九節二九一
 九十節二九二
 九十一節二九三
 九十二節二九四
 九十三節二九五
 九十四節二九六
 九十五節二九七
 九十六節二九八
 九十七節二九九
 九十八節三〇〇
 九十九節三〇一
 一百節三〇二

を觀たり 坑を掘る者ハみづから之にちらいり石垣を毀つ者ハ蛇に咬れん 石を打くだる者ハうらがた
 めに傷を受け木を割る者ハうらがたために危難に遭ん 鐵の鈍くられるわらにうの刃を磨ぎきバカを多
 く之にもたがざるを得ず 智慧ハ功を成に益あるあり 蛇もて呪術を馳弄して咬バ呪術師ハ用かじ 智者
 の口の言語ハ恩徳あり 愚者の唇ハうの身を吞ほらばす 愚者の口の言ハ蛇ハ愚かりましたの言ハ終ハ狂
 妄にして惡し 愚者の言語を棄くす人ハ後に有ん事を知るか誰か 身の後にあらんとこの事を述るを
 得ん 愚者の勞苦ハうの身を疲らす 彼ハ邑にいてることをも知ざるなり 子の王ハ童子にしての侯伯ハ
 朝に食をす 國よ汝ハ福あるか かの王ハ貴族の子またの侯伯ハ群衆をたためからずカを補ふために
 適宜な時食をす 國よ汝ハ福あるかな 懶惰どころよりして屋背ハ落ち手垂をるところよりして家
 屋ハ漏る 食事をもちて笑ハ喜ぶの物さかじ酒をもて快樂を取り 銀子ハ何事にも應ずるあり 汝心の中ハ
 ても王たる者を誣ふかかれまた寢室わても富者を誣ふかかれ 天空の鳥ハうの聲を傳ハ物翼ある者ハの事を
 布べければあり

【第十一章】 汝の糧食を水の上お投よ多くの日の後に汝ふたゞび之を得ん 汝一箇の卵を七また八にわ
 けて其ハ汝如何ある災害の地にあらんかを知されたり 雲もし雨の充るわれバ地わ注ぐまた樹もし南
 か北を倒るるわれハの樹ハ倒れたる處わあるべし 風を同ふ者ハ種播こどもを得ず 雲を望む者ハ刈こど
 を得ず 汝ハ風の道如何あるを知らずまた孕める婦の胎わ骨の如何小生長つを知らず 斯汝ハ萬事を爲た
 せん 神の作為を知とぞなし 汝朝小種を播け夕小も手を擱るかかれ 其ハうの實る者ハ此なるか 汝ある
 か又ハ二者どもに美なるや 汝これを知さざんや 夫光明ハ快き者なり 目に目を見るハ樂し 人多くの

千八百五十五節
 千八百五十六節
 千八百五十七節
 千八百五十八節
 千八百五十九節
 千八百六十節
 千八百六十一節
 千八百六十二節
 千八百六十三節
 千八百六十四節
 千八百六十五節
 千八百六十六節
 千八百六十七節
 千八百六十八節
 千八百六十九節
 千八百七十節
 千八百七十一節
 千八百七十二節
 千八百七十三節
 千八百七十四節
 千八百七十五節
 千八百七十六節
 千八百七十七節
 千八百七十八節
 千八百七十九節
 千八百八十節
 千八百八十一節
 千八百八十二節
 千八百八十三節
 千八百八十四節
 千八百八十五節
 千八百八十六節
 千八百八十七節
 千八百八十八節
 千八百八十九節
 千八百九十節
 千八百九十一節
 千八百九十二節
 千八百九十三節
 千八百九十四節
 千八百九十五節
 千八百九十六節
 千八百九十七節
 千八百九十八節
 千八百九十九節
 千九百節

年生かから入るの内凡て幸福なるも亦幽暗の日を憶ふべきなり 其ハうの數も多かるべければあり 凡
 て來らんとこの事ハ皆空なり 少者ハ汝の少き時に快樂をかせ 汝の少き日ハ汝の心を悦なして 汝の心
 の道に歩み 汝の目に見るどころを爲せよ 但しうの諸の行爲のために 神汝を罰きたまはんと知べし 然
 汝の心より憂を去り 汝の身より惡きを除け 少き時と壯年の時ともお空なればなり

【第十二章】 汝の少き日ハ汝の遺士を記之 夫即ち惡き日の來り年のよりて 我ハ早何も樂むどころ無し
 と云わいたらざる先 又日や光明や月や星の暗くからざる先 雨の後 雲の返らざる中お汝然せよ 若
 の日いたる時 人家を守る者ハ裸ハ力ある人 之扉ハ磨碎者ハ算きによりて息か窓より窺ふ者ハ目昏むかり
 磨くべき 磨低くなれば 御の門ハ閉づの 人ハ鳥の聲も起わらばす 敵の女子ハみな身を辱くす かくる人
 人ハ高き者を恐る 畏しき者多く 途にわらば 且香ハ花咲く また 蝗もろの 身も重くろの 嗜欲ハ廣る 人永遠の
 家わいたらんとす 汝は粟欄にゆきかふ 然る時に 銀の紐ハ解け 金の蓋ハ碎け 吊瓶ハ泉の側わ境を離
 艦ハ非の傍に破ん 而して塵ハ本のてどくに 土に航り 鐵塊ハこれを擲けし 神わかへるべし 傳道者云ふ
 空の空なるかな 皆空なり 又た 傳道者ハ智慧あるが故に 恆に知識を民お教へたり 彼の心をもちて 尋ね
 突め 許多の偽言を作れり 傳道者ハ務めて佳美き言語を求めたり 彼の書えたる者ハ正直して 眞實の
 言語なり 智者の言語ハ刺戟のおどく 會衆の脚の釘たる 釘のてどくにして 一人の牧者より 出でし者なり
 わが子よ 是等より 訓誡をうけよ 多く書をつくれ 志意あし 多く學ぶ心 體疲る 事の全體の版する所を 聽べし
 云く 神を畏れろ 誠命を守れ 是ハ諸の人の本分なり 神ハ一切の行爲あらびに 一切の隠れたる事を 審
 どもお審判たたまふなり

千八百九十一節
 千八百九十二節
 千八百九十三節
 千八百九十四節
 千八百九十五節
 千八百九十六節
 千八百九十七節
 千八百九十八節
 千八百九十九節
 千九百節
 千九百一節
 千九百二節
 千九百三節
 千九百四節
 千九百五節
 千九百六節
 千九百七節
 千九百八節
 千九百九節
 千九百十節
 千九百十一節
 千九百十二節
 千九百十三節
 千九百十四節
 千九百十五節
 千九百十六節
 千九百十七節
 千九百十八節
 千九百十九節
 千九百二十節
 千九百二十一節
 千九百二十二節
 千九百二十三節
 千九百二十四節
 千九百二十五節
 千九百二十六節
 千九百二十七節
 千九百二十八節
 千九百二十九節
 千九百三十節
 千九百三十一節
 千九百三十二節
 千九百三十三節
 千九百三十四節
 千九百三十五節
 千九百三十六節
 千九百三十七節
 千九百三十八節
 千九百三十九節
 千九百四十節
 千九百四十一節
 千九百四十二節
 千九百四十三節
 千九百四十四節
 千九百四十五節
 千九百四十六節
 千九百四十七節
 千九百四十八節
 千九百四十九節
 千九百五十節

傳道之書終

Faint text at the bottom of the page, likely bleed-through from the reverse side or a very faded print.

雅歌

Main text of the page, including a large block of vertical text and a table of contents on the right side.

Table of contents with entries such as '五五〇號', '五五二號', '五五三號', etc., and corresponding page numbers.